

パネルディスカッション

内野氏 人口減少が進む中、リスクを取らなければ将来シリ貧になるとの問題意識から本年度は「地域の分水嶺（りすく）を超えて挑戦する」というテーマを設定した。そうした中、最近のIoTなどの動きは新しいビジネスチャンスにつながるのではないかと、という先導的な皆さんから現場の声、最新の話伺い、参考にした。

田島氏 弊社は1995年、草薙で起業した会社で、主に



田島氏

パソコン周辺機器の開発・販売をしている。例えばプリンターのコントローラー、制御用のLSIの製造・販売やそ

れを動かすソフトウェア、組み込みソフトを自社で作っている。プリンターはPC以外では最も早くネットにつながった、IoT化された装置とも言える。

今ではデジタルコピー機は紙がない、トナーがないといった情報はネットから業者に伝わり、持ってくる。こうしたサービスは進化し続けている。また、最近ではホームエネルギーマネージングシステム、HEMSの商品の開発・販売を始めたところだ。

▽掛け算で農業をハッピーに
加藤氏 菊川市にある起業6年半の会社。農業シンク&アクシオンタンクといったり、ベジプロバイダー、つまり野菜流通事業を行っているが、農業にいろいろ掛け算をすることによりハッピーにという事業に取り組んでいる。元々は農業とは無縁だったが、静岡大の講座で農業者と出会い、数百万円の取引なのに契

ビジネスチャンスに生かせ

約書1枚ないクローズドの領域だと知った。閉ざされているといずれ縮小、滅びるのは



加藤氏

世の常。そこでブログを通じて5カ国語でいろいろな情報を発信するとともに、人とのつながりもでき、今の立ち位置になったのは3年くらい前から。今は農業×ロボットとか農業×IoTなどいろいろなものに取り組んでいる。

齋藤氏 駿河区中田にある会社で、主に地元の紙パルプや食品、工作機械、薬品関係の工場の自動化と生産ラインの構築を手掛けている。工場内には元々さまざまな信号が張り巡らされていて既にIoTをやっていると考えていたが、本格的に取り組むようになったのはリーマン・ショック後だ。海外移転でかなり出

て行ったが、最近是国内に戻ってくる動きもあり、そうした客からこれまでとは全く違う発想の工場をという要望が増えた。コントローラーに力点を置いた制御するIoTや照明の自動制御などを手掛けている。

内野氏 それぞれIoTへの手応えを感じていると思うが、その背景、要因など伺いたい。

田島氏 実は12年前に一度製品化したのが、失敗した。あるセキユリティー会社に売っていただけ売ってくれと言われ

◇パネリスト

田島 豊久氏 ナルテック代表取締役
加藤百合子氏 エムスクエア・ラボ代表取締役
齋藤 彰利氏 協立電機技術開発本部開発部長

◇コーディネーター

内野 孝宏氏 静岡経済研究所主席研究員
(当懇話会研究部会委員)

た。中小企業の場合、ハードはなかなか使ってもらえない。最近、IoTが盛り上がりつつあるのは通信のスピードアップ、信頼性の向上がある



からだろう。

10年前、セキュリティ会社では電話回線を使っていたが、今ではすべてIT化している。インフラの整備が大きい。携帯で家の鍵の締め忘れなどをチェックできる製品も出てきたが、こうしたものは

これから認知症の老人の徘徊チェックなどいろいろなサービスに応用できる。

内野氏 加藤氏に伺いたいのが、農業分野ではIT化は難しいのでは。

加藤氏 農業界は最先端の技術が浸透しにくい。IT化を進めているのは他産業からの参入がほとんど。では流通と生産という両面から説明すると、私どものベジプロバイダーは生産者と購買者をつなぐもので、例えばレストランが今はどうな野菜がおいしいか、そういう情報をコンサル含めて提供している。

ITシステムでやろうとしたが、実はあまり活用されない。そこでDropboxを使って情報の共有化を図っている。事業連携という中でうまくいかないでようやく効果が出る。生産ではソフトバンクなど大手がベンチャーと連携して事業化に乗り出している。ただ、生産者の平均年齢は67歳を超えている。IoTと言っても無理。なかなか広がらないのが現実。ただ、農業界は輸送

IoTは目的ではなく手段

などインフラ系の機能も多い。物流などにはかなり生かせるのではないかと思っ

内野氏 IoT化とFA化はどう違うのか。また各自のユーザーの反応などを聞いた

▽ユーザーに切迫感

齋藤氏 今が旬だと感じている。どこのイベントに行っても活況を呈している。ユー



齋藤氏

ザーに聞くとIoTじゃないとだめといった切迫感、危機感すら感じる。

IoT化は手段であり、皆さんの目的は24時間稼働の無人工場の実現。高度経済成長期の日本の工場はベルトコンベア方式だ。それがやがて中国や東南アジアに移転し、日本では多品種少量生産といっ

て、1人の作業者が完成まで担当し、検査までするセル方式、屋台方式に変わった。ただ、こうしたセル方式など日本ではいいが、中国などでは離職などもあって行き詰まりを見せている。そこで無人化という方向性が出てきている。いずれはアマゾンに朝発注したら夕方にはその製品が届く時代が来ると思う。

田島氏 スマートグリッド（次世代送電網）社会と言われるが、私自身まだ分からない。ただ、自動車は電気になるだろうし、今は検針員の問題などもあって無理でもいずれはスマートメーターなども出てくる。スマートグリッド社会は少しずつ実現していくと思う。

一方、半導体を扱っているが、日本は台湾、中国、韓国にコスト面で負けてどん底の状態。しかし、プリンターのコントローラーというスペシャリティーな部分で特化し、継続していく。回路の設計も今はボタン1つでできてしまう時代。うちの技術者に

はなるべく東京あたりで開かれるイベントに行き、いろいろな意見や声を聞くように言っている。

加藤氏 今ロボットに取り組んでいる。これまでは人をア



シストするという視点で考えられてきたが、作業そのものを見直し、無人化できないかという発想で研究に取り組んでいる。将来はロボットで無人化され、生産から収穫までできるようになるかもしれない。

齋藤氏 IOTはあくまでも

手段。これからは目的に合わせる進化していく。マクロ、ミクロの環境変化に対応できるようにすることが大切。

リーマン・ショック後、静岡県は就業人口は減ったが、工業生産高は横ばいが増。つまり工場の無人化が進んだ。他県に先んじてこうした経験を静岡県はしているので悲観的になる必要はないと思う。

▽中部でIOTの理想形を

内野氏 IOTが重要な課題になっているのは間違いない。これをいかに活用して新しいビジネスモデルをつくるのか。まだ発展途上とはいえない。



内野氏

IOT活用の理想形を静岡県、そしてこの中部地域で考え、実現していきたい。

27年度事業報告など承認

静岡県中部未来懇定時総会

一般社団法人・静岡県中部未来懇話会は6日、平成28年度定時総会を静岡市葵区のホテルアソシア静岡で開き、27年度事業報告などを原案通り承認した。

総会には正会員125人のうち代理、委任状提出を含め



112人と賛助会員、特別会員が出席した。

初めに大石剛会長（静岡新聞社長）があいさつし、「先月は伊勢志摩サミットとオバマ米大統領の広島訪問が終わった途端、安倍首相による消費税増税の再

延期という話が出てきた。財政上は上げなければならぬが、現在の景気や消費低迷の中での引き上げは実際厳しいものがある。7月には参院選も予定されており、一層暑い夏になりそうだ」と話した。

続いて平成27年度事業報告・決算報告、任期満了に伴う理事改選を審議し、原案通り承認した。新理事には山田潤・焼津水産化学工業社長、西村やす子・司法書士法人つかさ代表、谷川治・静岡放送常務を選任、山本和広・焼津水産化学工業会長、大島一宏・特種東海製紙専務執行役員、村松夏夫・静岡新聞社常務は理事を退任した。また、運営委員、研究委員の一部変更、中部地域経営会議の経過報告なども行われた。この後の理事会では代表理事選任を原案通り承認した。